



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パウロ「ローマの信徒への手紙」(1・20)に関するクザーヌスの解釈について
Author(s)	野沢, 建彦
Citation	基督教学, 28, 16-19
Issue Date	1993-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46526
Type	journal article
File Information	28_16-19.pdf



パウロ『ローマの信徒への手紙』(一・二〇)に

関するクザーヌスの解釈について

野 沢 建 彦

一、神の自然的存在証明として伝統的典拠となってきたローマ書(一・二〇)に関するクザーヌスの解釈を通して、何故「可能現実存在」*Possent* が神に十分肉薄した名称であるかを確かめ、クザーヌスの神への接近に迫ってみたい。「神の不可視なもの、すなわち神の永遠の力と神性とは世界の創造によって (*a creatura mundi*) 造られたものを通して認知される。」クザーヌスはこの一節を次のような仕方で説明しようとする、「もし被造物が認識されるとすれば、神の不可視なものが認知される。」

二、われわれの認識はまず感覚的に見るという事実からはじまるが、このことはそれ自身から来ているものでは

ない。より高位の力による。その力とは、世界の創造という高位の力である。新約聖書及びトマスでは、*a creatura mundi* は世界の創造された時からと訳され、時間的経過を示すものにすぎないが、クザーヌスは世界の創造という神の行為によってと解釈する。その行為によって不可視なものが知られ、世界という被造物の中に不可視なものが可視的に存在する。

三、トマスもクザーヌスと同じく、被造的知性の神に対する比はない、と考えるが、トマスによると神と被造物の間には量的な比は存在しないが、何らかの関係があり、世界に反映している神性を通して神の存在が自然的に認知される。クザーヌスは両者の間には何の比も存在せず、絶対的差異、否定を武器として恩恵によらず、あらゆる知の地平を突破していく。神は人間の知には不可解事であり、知はその極みにおいて自らの弱さを暴露し挫折する。感覚されるものはそれ自身によって存在することは不可能であり、限界されているゆえに、より高位の力によらねばならない。神の永遠の力が世界と被造物の中に存在する。可能が即時に存在する最高の存在のあり方を

クザーヌスは、「可能現実存在」Possessという神に肉薄した名称で呼ぶ。このPossessによって、現実存在する被造物はすべて存在が可能になる。神の創造の力、永遠の力はPossessという最も単純で肉薄する概念によって表現される。この概念の中に被造物が含まれる。それゆえ、被造物は自らの由来をたどっていけばこのPossessに行きつく。

四、人間は常に新たにのおのれ自身になりうるということが可能な存在である。新たな可能性におのれを投げかけていく。しかし、人間の存在可能性は欠如的で、非本来性へと傾くゆえに、完全なPossessにたよらざるをえない。

ゆえに、被造物はそれとの対極にあるPossessによっておのれの存在が照らし出されるのである。それゆえ被造物の現実可能性はその原型であるPossessを開示する。

五、クザーヌスは、パウロも被造物と神は無限に異なっているとのめかしている、と指適する。彼はトマスのように、世界に反映している神性をとおして神の存在を自然本性的に知りうるというふうには、本論の主題に際して採らない。被造物と神との間には比はない。あるも

のは絶対的差異、深淵である。それはとりもなおさず、すべてのものは神のシルシでしかない、ということになる。神の不可視なものは人間の知には不可解事であれば万物はすべて象徴ということになる。

六、とすれば、被造物がPossessのシルシであるばかりではなく、Possessという神に肉薄する名称自体もシルシ、あるいは「ぼんやりした映像」ということになる。神の不可視なものはPossessというぼんやりした映像に映し出され、観らる姿である。映し出された像においてしか神の不可視なものはこの世においては認知されない。被造物の中に映し出されたPossessの像において、われわれは不可視なものをほのかに見ることができる。このぼんやりした像というこの世の端は、神の端への橋渡しの役を演じる。名指されうるものに適用されたPossessというぼんやりした映像は、名指されえないものへと上昇する。ぼんやりした映像には終りがない。

七、神は自然的には、ぼんやりした映像においてしか観ることはできない。この自然的な観ることの相を去って、観られないままにとどまり続ける方を観るときがきた。

シルシの知から、内的直観によって、*Possess* 自体の本質へと向かう時が。この際クザーヌスは恩恵をほのめかしているが、それはトマスのように自然理性が恩恵と調和し、強め合う構図ではなく、一つの挿話のような響きがある。クザーヌスはむしろ、恩恵によらず、基本的には自然的可知的光の地平をどこまでも突破し、あえて知の闇の中へと自らをおいて、知の破滅において神の開示を期待する（反対の一致）。ここに到るまで、ローマ書（一・二〇）が、クザーヌスの旅の伴侶になったかは、しかし、疑問である。

八、本論の主題はパウロの手紙（一・二〇）のクザーヌスの解釈をとおしてクザーヌスが何を語りたかったかを明らかにすることであった。

ごく大まかに言えば、トマスは同節を被造物の中に神性の反映を見る、と解釈し、同節を神認識の自然理性による根拠づけの典拠とする。クザーヌスも、結論においては、神が万物に反映するという点ではトマスと同じ表現となるが、『可能現実存在』においてのクザーヌスのローマ書（一・二〇）解釈の独自性は *a creatura mundi* を

創造の力と端的に規定したところにある。そこに着目したクザーヌスは、そこから *Possess* の神概念を構築し、*Possess* の対極にある力と無力の交錯する人間の可能的存在の中に、*Possess* の開示する像を見る。それはおぼろげる像のうちに浮かび上がるにすぎないが。

先に、クザーヌスは「もし被造物が認識されるとすれば、神の不可視なものが認知される。」という仮説を立てたが、トマスは、「神は、その結果の表徴を通し、自然認識によって認識される。」と主張し、また、アウグスティヌスは、全被造物は、私がそれではない、それは私を造った方であると呼び、それぞれの世界遍歴からこの仮説に回答を与えている。クザーヌスは自らのうちに存在根拠をもたない被造物はより高位の力によって存在せしめられていることを自覚し、神に肉薄した *Possess* という名称に行き着く。そして、それとの対極に、被造物の姿が *Possess* に於て映し出される。しかし、*Possess* 自体の本質ということになれば、認識不可能であるがゆえに、われわれの知にはシルシでしかありえない。そこで、われわれはシルシの知を停止し、*Possess* 自体の本質（創

造主へと、無知という仕方で飛躍するとき、それは知解されえないものとして自らをあらわにする。すべての表象像から解き離される無知という仕方で、われわれは自分自身のうちに創造主のシルシを見、自らが神に似たものに脱存する。神性が被造物の中に輝く。時間は自らを脱存し、神性が自らを時間に於て開示する。この時、時間は永遠のシンボルであるという謎、被造物が神の不可視なものの似像である、という謎が真に理解される。